

「八重山古陶」展 関連文化講座 報告

倉成多郎

那覇市立壺屋焼物博物館では、平成19年7月31日から8月12日まで、企画展「八重山古陶 ～その風趣と気概～」を開催した。2週間の会期で、約1600名の入館者があり、関心の高さが伺えた。

本企画展は、早稲田大学會津八一記念博物館で平成19年6月25日～7月14日に開催されたものが、企画者と早稲田大学、さらには展示作品所蔵者の協力を得て、当館、さらには8月17日から25日まで大濱信泉記念館（石垣市）で実施したものである。

展示内容は、八重山で焼成された施釉陶器を展示の中心すえて構成されている。八重山の施釉陶器については、作られてはいたが技術も質もレベルは低いというのがおおよその認知であった。しかし、本企画展では、近年黒石川窯跡から発掘された施釉陶器片と伝世品とを照合し、八重山で高い技術と品質の焼物が製作されていた可能性を示唆した。また、従来、喜名焼・古我知焼・湧田焼とされていた伝世品についても、黒石川窯跡出土の陶器片との照合結果から、八重山焼として展示をした。企画者の一人、丹尾安典氏が言うとおりの「今回の展示は、八重山の陶器のみならず、沖縄全体の陶器史に再考をうながし、さらには交易、産業史にも問題を提起する契機となりうる」（本展図録）ものであった。当然、当展示には異論も出るであろうことは企画者も当館も予測をしていた。

当館では、この賛否の声があがるであろう展示を契機に、近世窯業史の議論が活発なることを願い、関連文化講座をおこなった。講師には陶芸家であり元沖縄県立芸術大学学長の大嶺實清氏、「八重山古陶」の企画者の一人である石垣市教育委員会文化課の阿利直治氏をお招きした。

次頁以降の文章は、この講座の録画ビデオを当館職員がテープ起こししたものである。いい間違いや、口述独特の繰り返しなどは適宜訂正した。また、音声聞き取れない場合も修正をおこなっている。よって、本文についての責任は全面的に当館が負っている。

講師をお引き受けくださり、また講座内容の紀要掲載についてご了解を賜った、大嶺實清氏、阿利直治氏にあつく御礼を申し上げます。

くらなり たろう：（壺屋焼物博物館 学芸員）